

タイにおける第 2 次世界大戦後の日本兵の集結と武装解除

柿 崎 一 郎 *

Concentration and Disarmament of Japanese Soldiers in Thailand After World War II

KAKIZAKI Ichiro*

Abstract

This article aims to construct an overall image of the concentration and disarmament of Japanese soldiers in Thailand after World War II and analyze its impact. Japanese soldiers in Thailand—a total of about 120,000 at the end of the war—were assigned to 11 concentration camps after the arrival of the Allies at the beginning of September 1945, followed by five concentration camps in November. However, the soldiers' transfer to the second set of camps was not completed by the end of 1945 since movement from the North stagnated. Disarmament was carried out in the first set of concentration camps, with the disarmed Japanese soldiers coming under the control of the Thai army. The Thai army was garrisoned at the concentration camps, which it secured.

The concentration and disarmament of Japanese soldiers caused several problems in terms of transportation, lodging, and theft. The efficiency of the Thai railways was reduced by air raids during the war, which resulted in delays in the return of Thai soldiers from the North since priority was given to the movement of Japanese soldiers and supplies. Although the lodgings in the camps were constructed by Japanese soldiers, Thais had to procure construction materials and construct lodgings for Thai soldiers at the camps. The Japanese army's abundant supplies and arms in the camps and dumps resulted in frequent thefts and robberies, some of them involving Thai soldiers.

Keywords: World War II, Thailand, Japanese soldiers, Allied army, concentration, disarmament

キーワード：第2次世界大戦，タイ，日本兵，連合軍，集結，武装解除

* 横浜市立大学国際教養学部；School of International Liberal Arts, Yokohama City University, 22-2 Seto, Kanazawa-ku, Yokohama, Kanagawa 236-0027, Japan
e-mail: kaki@yokohama-cu.ac.jp
DOI: 10.20495/tak.25001

2024 年 12 月 26 日 掲載決定, 2025 年 5 月 16 日 J-STAGE 早期公開

はじめに

1945 年 8 月 14 日に日本がポツダム宣言を受諾し、翌日正午に天皇が終戦の詔書を読み上げる「玉音放送」がラジオで報じられたことで第 2 次世界大戦は終結に向かうことになった。日本と同盟を組んで枢軸国側に立ちアメリカとイギリスに対して宣戦布告をしていたタイは、戦争末期には抗日組織の自由タイが連合軍と関係を構築して日本に対して反旗を翻す準備をしており、当時のクアン（Khuang Aphaiwong）政権は表では日本との同盟を維持しつつ裏では連合軍側と接触するという完全な二面外交を行っていた。そして、8 月 16 日には事実上の自由タイのリーダーであった摂政プリーディー（Pridi Phanom-yong）が英米に対する宣戦布告は無効であるとする「平和宣言」を行った〔柿崎 2022: 14-16〕。これを契機に、タイは戦後処理を進めていくことになり、9 月には日本軍の武装解除を目的とした連合軍を受け入れることになる。

日本軍の戦況悪化と共にタイは徐々に後方から前線としての役割が重視されたことから、戦争末期には主に西のビルマから大量の日本兵が流入し、終戦の時点では約 12 万人の日本兵がタイ国内に駐屯している状況であった。日本兵の集結、武装解除、そして帰還は第一義的には連合軍の任務であったが、9 月 8 日にセイロンに派遣されたタイ軍代表と連合軍東南アジア司令部最高司令官マウントバッテン（the Lord Louis Mountbatten）との間で調印された暫定合意によって、タイは連合軍による日本軍の武装解除に協力することが義務付けられていたことから、日本軍の集結と武装解除にはタイ側も関与することになっていた。¹⁾ このため、タイも実質的に日本軍の集結と武装解除のために様々な対応を行い、またそれによる影響を受けることになった。

この戦後処理の一環としての日本兵の集結と武装解除については、これまで本格的な研究対象とされたことがなく、その詳細は未解明のままとなっている。レイノルズ（E. Bruce Reynolds）は自由タイと英米の関係について、戦時中から 1946 年 1 月のイギリスとの平和条約締結までの時期を外交史的側面から扱っているが、日本兵の集結と武装解除については言及していない〔Reynolds 2005〕。同じく自由タイの歴史をまとめた市川健二郎は、日本軍の武装解除について言及はしているものの概説の域を脱していない〔市川 1987: 179-181〕。²⁾ タイ人では、日タイ関係史をまとめたタウィー（Thawi Thirawongseri）が終戦後の日本軍の集結と武装解除に言及しているものの、こちらも市川と同じ程度の情報しか提供していない〔Thawi 1981: 189-191〕。³⁾

1) NA BKST 3/125 “Kho Toklong Thang Thahan Chuakhrao Kho Toklong rawang Phu Banchakan Thahan Sungsut Samphanthamit kap Phon Tho Sak Senanarong Huana Khana Thut Thahan Thai thi Song Pai yang Kong Banchakan Thahan Sungsut Samphanthamit Phak Echia Tawan-ok Chiang Tai.”

2) 彼は日本軍の武装解除という節を立ててはいるものの、その記述は 2 ページ程度でしかない。

3) 彼の情報源は連合軍の対日戦史である Kirby [1969] のみであり、日本兵の集結と武装解除に関する記述も 1 ページ強に過ぎない。

一方、日本側では増田弘による南方からの日本兵の抑留と復員に関する研究があり、タイについては主にイギリス側の資料を用いて概要を説明しているものの、タイ国内での具体的な日本兵の集結や武装解除の状況を明らかにしているわけではない [増田 2019: 7-119]。すなわち、タイ国内で日本兵の集結がいつ、どこで、どのように行われたのかは依然として解明されていないのである。

また、タイは日本軍が展開した「大東亜共栄圏」内で唯一現地政府が存在した場所であったことから、他地域とは異なり日本軍の集結と武装解除に際して現地政府の協力が期待できた。⁴⁾ 連合軍側も当初タイに2個師団の派遣を予定していたが、タイ政府の協力が得られることが判明したために結局1個師団のみの派遣に留めていた [Prasad n.d.: 216]。マウントバッテンも、タイに派遣された英印軍がタイ側の手厚い態度に助けられたと回想していた [宮元 1985: 77]。このように、タイにおける日本軍の集結と武装解除については他地域と比較しても特殊な事例であり、タイ側の協力が得られたと連合軍側がおおむね評価していたとはいえ、連合軍側とタイ側との関係性の実像はこれまで解明されてはおらず、増田もこのようなタイの特殊性に言及しているわけでもない。

このため、本論はタイ国内における日本軍兵士・軍属（以下、日本兵）の集結と武装解除の全体像を構築したうえで、その問題点を分析することを目的とする。以下、Iでは日本兵の集結状況を、IIで日本軍の武装解除の状況をそれぞれ解明し、IIIで日本軍の集結と武装解除がもたらした問題点を分析する。資料としては、タイ国立公文書館（National Archives of Thailand: NA）所蔵の軍最高司令部文書（Kong Banchakan Thahan Sungsut: BKST）を中心に用いる。

I 日本軍の集結

1. 第1次集結

タイ国内には終戦の時点で約12万人の日本兵が駐屯しており、その駐屯箇所はバンコクその他全国各地の計98郡に分布していた [柿崎 2022: 108-111]。一部の日本兵は依然として移動中であり、北部のチェンマイ～タウンゲー道路経由ではビルマから逃れてきた第56師団を中心とする約1.1万人の兵がチェンマイを目指し、泰緬鉄道経由でもビルマからタイへと移動中であった第15師団と第33師団の約4万人のうち、終戦の時点ではまだ1万人がタイに到着していなかった [柿崎 2018: 311-316]。また、仏印のラオス経由でタイを目指していた第22師団も大半がメコン川を渡って東北部のムックダーハーンに入ったところで終戦を迎えていた [同上

4) ここでの現地政府とは、いわゆる日本による傀儡政権を含まない。仏印についても長らく現地政府（植民地政庁）が温存していたが、1945年3月の明号事件で日本軍によって解体され、終戦時にはタイのみが日本による傀儡政権を除く唯一の現地政府となっていた。

書：318-319]。これらの部隊はそのまま目的地に向かって移動を続けており、少なくとも8月中は日本軍の駐屯状況に大きな変化はなかったものと考えられる。ただし、分隊が派遣されていたような地点では日本兵の撤退が見られ、例えば東北部のサコンナコーンでは8月28日に日本兵がすべて撤退していた。⁵⁾ このため、日本兵の駐屯箇所は減少し始めたはずである。

9月に入って連合軍がタイに到着すると、日本軍の集結が本格的に始まることになった。⁶⁾ 図1は第1次集結が始まる直前の日本軍(第18方面軍)の集結地を示したものである。この時点でバンコクには最も多い1.6万人の日本兵がおり、次いで北部のチェンマイが1.4万人となっていた。⁷⁾ この時点では終戦時に日本軍が拠点を置いていた地点がそのまま集結地となっており、北部のラムパーンには第15軍司令部と第4師団の主力が集まっており、東北部のウボンには第22師団の集結地となっていた。また、泰緬鉄道経由でタイに入ってきた第15師団と第33師団はそれぞれカーンチャナブリー・バーンポーンとナコンパトムに集結していた。

なお、この図では第18方面軍の管轄区域外であった南部の集結地が記されていないが、南部各地に展開していた第94師団は最終的にマラヤに集結することになっており、9月に入ってから動きが見られるようになった。例えば、プーケットには約1,000人の日本兵がいたが、彼らはまずトランへと集結することになり、9月1日には軍需品の管理を行う約50人を除いてプーケットを発っていた。⁸⁾ また、サトゥーンでも9月上旬までに県内にいた日本兵はすべてハートヤイに退去していた。⁹⁾ 南部での日本軍の集結地の詳細は判明しないが、少なくともチュムポーンは第94師団の集結地として機能しており、後述するように日本兵の武装解除も行われていた。¹⁰⁾

このような状況の中で、9月21日に第18方面軍は隷下の各部隊の司令官に対して、国内の計9カ所に1週間以内に兵を集結させるよう命令を出した。¹¹⁾ これらの箇所は表1のバンコクとタークリー以外の9カ所であり、バンコク、泰緬鉄道沿線、南部については別途命令を出す」と記載されていた。¹²⁾ 最終的な第1次集結地の数は南部を除いて計11カ所であり、原則として

5) NA BKST 3. 7/15 “Sombun Krabuanrat sanoe Kho No. 1945/09/27” サコンナコーンには1945年4月の時点で6人の日本兵がいた [柿崎 2022: 565]。

6) 武装解除のための最初の連合軍は9月3日にドーンムアン飛行場に到着した [Roberts n.d.: 265]

7) NA BKST 3. 7/12 “Phaenkan Chat Sathanthi Samrap Thahan Uen-uen Nok chak Thahan Thai. 1945/09/20”

8) NA BKST 3/7 “Tho. Thepphakham thueng Senathikan Thap Yai (Thoralek). 1945/09/05”

9) NA BKST 3. 7/15 “Sombun Krabuanrat sanoe Kho No. 1945/10/02”

10) チュムポーンは1944年10月に編成された第94師団の司令部が当初置かれた場所であり、その後司令部は南に移転したものの終戦の時点でも歩兵第258連隊の主力が置かれていた [防衛研 陸軍—中央—部隊歴史全般 80「マライ・ボルネオ方面部隊略歴」(C12122486200)]

11) NA BKST 3. 10/1 “Kham Sang thi 126 Kongthap Phak thi 18. 1945/09/21”

12) この命令ではロッブリーが含まれる一方でタークリーが含まれていないが、厚生省引揚援護局史料室 [2010: 264] には逆にタークリーが含まれる一方でロッブリーが含まれていないことから、表1ではタークリーとロッブリーを併記している。なお、連合軍側の記録でも11カ所の集結地区に分割したと書かれていることから [Kirby 1969: 295]、タークリーとロッブリーはそれぞれ1カ所ずつ計上するべきものと考えられる。

すでに主要部隊別に集結していた地点をそのまま継承して師団ごとに集結させることを念頭に置いていたが、一部地点では統合も行われていた。その結果、人数が最も多くなったのはバーンポーンの2.3万人であり、以下チェンマイの2.1万人、ナコーンナーヨックの1.8万人となっており、直前には1.6万人がいたバンコクは5,000人と大幅に減っていた。これは、連合

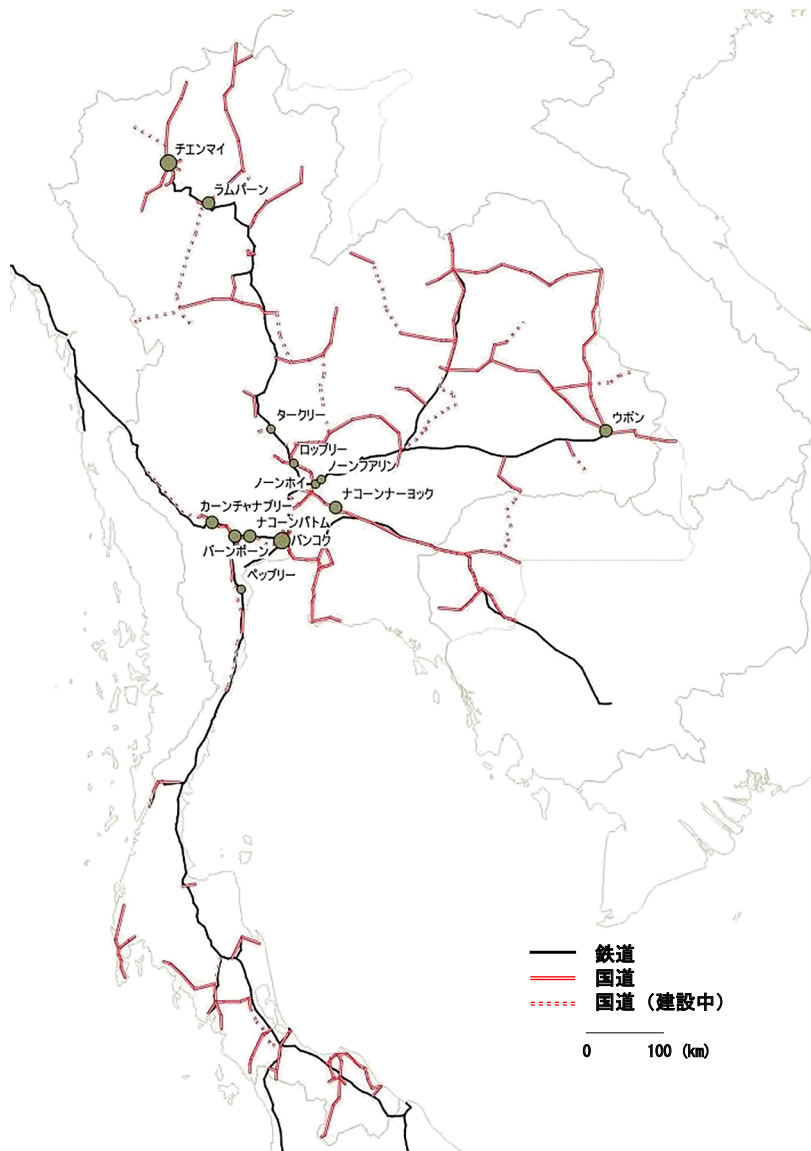


図1 日本軍の集結場所（1945年9月20日頃）

出所：NA BKST 3. 7/12 より筆者作成。

注：移動中の兵の駐屯箇所を除く。

表1 日本軍の集結

(単位：人)

	集結地	主要部隊	人数
第1次集結	バンコク	第18方面軍終戦司令部	5,000
	チエンマイ	第56師団, その他	21,000
	ラムパーン	第15軍司令部, 第4師団主力	6,000
	ウボン	第22師団	9,000
	ナコーンサワン	第4師団一部, その他	4,000
	タークリー	航空部隊主力	6,000
	ロッブリー		
	サラブリー (ノーンホイ)	鉄道, その他	8,000
	ナコーンパトム	第33師団	9,000
	バーンポーン	第15師団, 混成第29旅団, その他	23,000
	ナコーンナーヨック	第37師団, 第4師団一部, その他	18,000
	計		109,000
第2次集結	バンコク	第18方面軍終戦司令部	5,000
	ノーンホイ	軍直諸隊	9,000
	ナコーンパトム	第33師団	9,000
	バーンポーン	第15師団, 混成第29旅団, 鉄道等	23,000
	ナコーンナーヨック	軍直諸隊	50,000
	計		96,000

出所：NA BKST 3. 10/1, 厚生省引揚援護局資料室 [2010: 263-265] より筆者作成。

注：人数は厚生省引揚援護局資料室 [2010] による。

軍がバンコクの兵の大半をロッブリー, ノーンホイ, ナコーンナーヨックに移動させるよう命じたためであり, 9月21日の第18方面軍命令でも22日までにこの3カ所で宿舎の整備を行うよう命じていた。¹³⁾ 実際に, 残務処理と労務に従事する者を除き, 日本兵は9月23～27日にバンコクを発つことになり, 計13本の特別列車が運行された。¹⁴⁾

原則としてそれまでの集結地をそのまま継承していたが, 若干の集約化は行われていた。表1の第1次集結の地点と図1を比較すると, 図1に存在したカーンチャナブリー, ペップリー, ノーンファリンの集結地が表1では消えていることがわかる。カーンチャナブリーには第15師団の一部と独立混成第29旅団の一部が, ペップリーには後者の一部が集結していたが, こ

13) NA BKST 3. 10/1 “Kham Sang thi 126 Kongthap Phak thi 18. 1945/09/21” この命令ではナコーンナーヨックに6,000人, 残る2カ所に5,000人ずつ移動させるとしていたが, 実際にはバンコクにも5,000人が残ったことから移動した人数はこれより少なかったはずである。

14) NA BKST 3. 7/12 “Phaenkan Chat Sathanthi Samrap Thahan Uen-uen Nok chak Thahan Thai. 1945/09/20”, NA BKST 3. 11/5 “Special Trains Ex Hua Lampong. 1945/09” 連合軍側は23～27日の5日間にロッブリー, サラブリーへ1日1本ずつ, 23～25日にタールアへ1日1本ずつ運行し, 1列車1,000人の輸送力を確保するよう求めている。

の2カ所の集結地はバーンポーンに統合されることになった。また、ノーンファリンには第4師団の一部約2,500人がいたが、この部隊は第1次集結ではナコンナーヨックに移転することになっていた。¹⁵⁾ このような集結地の統合のために、表1のようにバーンポーンとナコンナーヨックの人数が多くなっていたのである。

バンコクからの日本兵の移転は計画通りに行われたが、それ以外の日本兵の集結はこの命令通り9月27日までに終了したわけではなかった。例えば、バーンポーンへの集結を命じられた独立混成第29旅団司令部は、10月13日頃バーンポーンに集結しており、20日に第161大隊がバーンポーンに到着したことでようやくすべての部隊がバーンポーン集結を完了した。¹⁶⁾ また、チェンマイ～タウンゲー間道路経由でのチェンマイへの集結はビルマから逃れてきた傷病兵も多数含まれていたことから移動に時間がかかり、この道路沿道の療養所の中には1945年12月初めまで開設されていたものも存在した。¹⁷⁾ おそらくは、このチェンマイへの集結が第1次集結の中で最も時間を要したものと考えられる。

2. 第2次集結

第1次集結に引き続き、連合軍側は日本兵をさらに特定の地点に集中させることを検討していた。当初連合軍側はタイ湾の島を日本軍の最終集結地として使用することを検討しており、9月19日にタイ側に対してその意向を伝えていた。¹⁸⁾ これを受けてタイ側はタイ湾の島計8カ所について面積、人口、水や食糧の確保に関する報告書をまとめていたが、日本兵約10万人を収容できるような島は存在しなかった。¹⁹⁾ 次いで、連合軍側はバンコク近郊に最終集結地を設けることをタイ側に打診し、当初南のサムットプラカーン（パークナム）と南西のサムットサーコーンにそれぞれ5.6万人ずつ収容することを検討していたが、10月4日の会議でタイ側はプラカノーンとサムローンの旧日本軍駐屯地を使うことを勧め、この2カ所が最もふさわしいということで合意した。²⁰⁾

しかしながら、この2カ所で日本兵を集結させるためには整備が必要であり、少なからぬ時間がかかることから、結局連合軍は第1次集結地の一部を最終集結地として使用することにな

15) NA BKST 3. 7/3 “Pho. Tho. Wek Chiaowet rian Cho. Po Pho. 1945/08” ノーンファリンの正確な位置が不明であるが、おそらくケーンコーイ付近であると考えられる。

16) 防衛研 陸軍—南西—泰仏印1「泰方面部隊史実資料綴（完）（帰還者報告）」

17) 防衛研 陸軍—南西—泰仏印1「泰方面部隊史実資料綴（完）（帰還者報告）」第124兵站病院は12月2日までこの道路沿線で患者集合所を開設しており、チェンマイへの集結を完了したのは12月上旬であったものと考えられる。

18) NA BKST 3/52 “Banthuek Kan Patibat Ngan Kiaokap Saha Prachachat khong Phanaek thi 4 Kong thi 1.”

19) NA BKST 3. 7/21 “Ko nai Ao Thai thi Khon Yu Dai Mak.” 最も収容人員が大きい南部のサムイ島でも5,000人と見積もられており、分散しても10万人を収容することは不可能であった。

20) NA BKST 3. 4/12 “No. O. Ekkachai Itsarangkun na Ayutthaya namsanoe Set. Tho Yo. 1945/10/09”

り、10月10日にはタイ側に対して日本軍の集結地をナコーンナーヨック、バーンポーン、ナコーンサワン、バンコクの4カ所にすることを伝えた。²¹⁾ この時点ではナコーンナーヨックが7万人と最も多く、次いでバーンポーンが3.1万人、ナコーンサワン1.8万人となっていたが、最終的に第2次集結地は表1のようにバンコク、ノーンホイ、ナコーンパトム、バーンポーン、ナコーンナーヨックの5カ所となった。ナコーンナーヨックが5万人と最も多くなっていることから、この第2次集結は主に第1次集結地のうち北部のチエンマイ、ラムパーン、東北部のウボン、中部上部のナコーンサワン、中部下部のタークリー、ロップリーの計6カ所の日本兵をナコーンナーヨックに移すことを目的としていたことが分かる。なお、1946年1月の時点で連合軍側はバーンポーンに集結させることも検討していたが、食糧確保の問題から最終的にナコーンナーヨックへの集結に決めたものと考えられる。²²⁾

日本側の資料によると、この第2次集結は11月上旬から開始され、12月末にラムパーンにあった第15軍司令部がナコーンナーヨックに到着することで完了したとされていた〔厚生省引揚援護局史料室 2010: 264-265〕。いずれの第1次集結地からも、ナコーンナーヨックへの徒步行軍の起点となるサラブリーやバーンパーチャーまで鉄道が利用可能であったが、東北部と中部からの輸送は順調に推移したものの、北部からは鉄道輸送力が著しく低下していたことから難航した。

東北部のウボンからの輸送は、鉄道輸送の障害が少なかったことから比較的短期間で完了したようである。ウボンで連合軍との連絡業務を行っていたタイ軍の歩兵第9連隊によると、ウボンにいた連合軍将校のヘッドリー（Hedly）少佐は11月5日の時点で22日から日本兵の移動を開始して30日までに完了させるとタイ側に伝えていた。²³⁾ 第22師団歩兵第85連隊長であった河野省介の回想でも、1945年12月上旬にウボンから列車と2泊3日の徒步行軍でナコーンナーヨックに移動したとされていることから、計画からそれほど遅れることなく移動が完了したのと考えられる〔藤掛 1986: 682〕。²⁴⁾

中部からも鉄道輸送が利用可能であったことから、同じく短期間で輸送は終了していた。連合軍将校の通訳としてナコーンサワンに派遣されていたカモン（Kamon Thatchapramuk）によると、ナコーンサワンでは11月9日から列車で日本兵の輸送が開始され、1日1,000人ずつ

21) NA BKST 3. 10/1 “Phon Tho So, Senanarong thueng Khana Thut Thahan thi 207. 1945/10/17”

22) NA BKST 3. 4/8 “No. O. Ekkachai Isarangkun na Ayutthaya namsanoe Set. Thahan. 1946/01/17” タイ側はカンチャナブリーの食糧が不足するので近隣県に依存する必要があるとして、バーンポーンへの集結には難色を示していた。

23) NA BKST 3. 7. 1/8 “Raikan Patibat Ngan Ruam kap Samphanthamit. 1945/10”

24) 河野はコーラートから2泊3日の徒步行軍でナコーンナーヨックに向かったと書いているが、コーラートからナコーンナーヨックまで2泊3日では到底到達できないことから、おそらくはサラブリーからの徒步行軍であったものと思われる。

ノーンブアまで輸送することになっていた。²⁵⁾ また、タークリーに派遣されていたプラチュム (Prachum Annawatthana) によると、タークリーでも11月9日から日本兵を輸送するための特別列車が運行され、12日までの計4日間で約7,500人を輸送したという。²⁶⁾ いずれもノーンホイの最寄りとなる東北線のノーンブアまでの輸送となっていたことから、ノーンホイ集結地に入ったものと思われる。

これに対し、北部のチエンマイとラムパーンからの移動は11月15日から開始され、11月の時点では鉄道輸送は12月末まで行われる予定となっていた。²⁷⁾ 戦時中の空襲の影響で北線のバーンダーラーのナン川橋梁が破壊されて使用できず、戦争末期からピッサヌローク～サワンカローク間は自動車を用いて橋梁を迂回する輸送が用いられていた [柿崎 2018: 86]。さらに、孤立区間となったサワンカローク～チエンマイ間の輸送力は非常に低かったことから、北部からナコンナーヨックへの徒歩行軍の起点まで鉄道が利用可能であったのは傷病兵に限られていた。²⁸⁾ 後述するように、多くの日本兵は全区間または一部区間で徒歩行軍を余儀なくされており、全区間徒歩行軍の場合は約1カ月間を要していた。²⁹⁾ バーンダーラー橋梁のあるウッタラディットに通訳として派遣されていたチュアン (Chuan Suwannaro) によると、バーンダーラーでの日本兵の輸送は1946年1月中も断続的に続いており、2月に入って彼がバンコクに戻るところまでようやく終了した状況であった。³⁰⁾ なお、この北部からの移動のために日本側はバーンダーラーとピッサヌロークに中継のための施設を整備していた。³¹⁾

最終的に、この第2次集結は1946年3月に入っても終了しなかった。表2は1946年3月1日と5月31日の各地の日本兵の人数を示したものであるが、これを見ると3月1日の時点でも移動中の日本兵が768人いたことがわかる。彼らはおそらく第1次集結地から第2次集結地へ移動中の兵であることから、第2次集結が依然として終了していなかったことを示唆している。³²⁾ 司令部ベースでは12月中に集結が完了したのであろうが、実際にはそれよりはるかに長い時間を要していたのである。

25) NA BKST 3. 6. 2/9 “No Ro. So Ho. Kamon Thatchapramuk sanoe Ho No. O So. 4 Tho Yo. 1945/11”

26) NA BKST 3. 6. 2/5 “No Ro. So Ho. Prachum Annawatthana namsanoe Rong Set. Thahan Fo O So. 1945/11”

27) NA BKST 3/42 “Adam Wilson Brand thueng Bo Ko. Tho Yo. 1945/11/15”

28) 例えば、患者輸送第72小隊は1945年11月24日からチエンマイ～ナコンナーヨック間で傷病兵の鉄道輸送を行っていた [防衛研 陸軍—南西—泰仏印1「泰方面部隊史実資料綴 (完) (帰還者報告)」]。

29) 歩兵第8連隊の戦史によると、ラムパーンを11月15日に発った第1梯団は約1カ月かかってナコンナーヨックに到着したという [歩兵第八聯隊史編纂委員会 1983: 586-587]。

30) NA BKST 3. 6. 2/12 “Chuan Suwannaro thueng Ho No. O So. 4 So Tho. Thahan. 1946/02” 彼は1月11日にバンコクを発ち、2月16日にバンコクに戻っていた。

31) NA BTST 3/42 “Adam Wilson Brand thueng Bo Ko. Tho Yo. 1945/11/15”

32) 原資料では「集結地へ移動中」としか書かれていないが、この時期に第1次集結地へ移動中とは考えられないことから、第2次集結地へ向けて移動中と捉えるのが妥当であろう。

表2 集結地別日本兵の人数 (1946 年)

(単位：人)

集結地		3 月 1 日	5 月 31 日
第 2 次集結地	バンコク	6,241	8,358
	ノーンホイ	9,425	8,965
	ナコーンパトム	9,156	236
	バーンポーン	7,330	7,269
	ナコーンナーヨック	59,535	69,954
計		91,687	94,782
第 1 次集結地	チエンマイ	379	—
	ラムパーン	381	410
	ウボン	505	500
	ナコーンサワン	666	—
	タークラー	91	97
	ロップラー	828	—
	移動中	768	—
計		3,618	1,007
未集結	バーンダーラー	783	829
	ピッサヌローク	659	466
	バーンポーン～カーンチャナブリー間	7,515	8,277
	タームアン	2,550	3,058
	カーンチャナブリー	2,425	1,640
	サイヨーク	13	13
	プランカーシー	64	64
	ニケ	29	29
	ラーチャブリー	—	803
	ベップラー	—	111
	チュムポーン	437	269
	ランスアン	156	—
	ブンピン	172	200
	計	14,803	15,759
総計		110,108	111,548

出所：NA BKST 3. 13/5. 3. 13/9 より筆者作成。

注：5 月 31 日のバンコクの数値は戦争犯罪容疑者 1,194 人を含む。

3. 日本兵の労務

このように、第 2 次集結は計画よりも大幅に遅れていたが、実際には第 2 次集結地に集められた日本兵以外にも、各地で連合軍の命令の下で労務に従事する日本兵が存在した。表 2 で未集結とされている日本兵は原則としてすべて労務に従事している者であり、その数はどちらの時点でも約 1.5 万人となっていた。また、この時点で第 1 次集結地に残っていた日本兵も大半

が連合軍の命令で労務や残務処理に従事していたものと考えられ、その数は3月1日の時点で約3,600人、5月31日の時点でも約1,000人存在した。³³⁾ 合計人数に若干の差はあるものの、3月1日の時点では全体の17%が、5月31日の時点でも全体の15%が第2次集結地に到着しておらず、各地で連合軍の労務に従事していたことになる。

この表からも分かるように、最も多くの日本兵が労務に従事していたのは泰緬鉄道であった。この時点では約1.3万人の日本兵が泰緬鉄道沿線に配置されており、鉄道の補修と運行に従事していた。この作業に従事させられていたのは、戦時中から泰緬鉄道の建設や運行を担当していた鉄道連隊や特設鉄道隊の兵であり、例えば1945年にビルマからタイに入って主に南線の防衛を行っていた鉄道第5連隊は、終戦後泰緬鉄道のタイ側区間の補修と運営を担当していた[大崎 1978: 561]。また、1944年から泰緬鉄道のタイ側区間の運営に従事してきた第10特設鉄道運輸隊も、従来の担当区間であったノンブラードゥック～ニケ間の運行を終戦後もそのまま引き継ぎ、後に一部区間を鉄道第5連隊と鉄道第11連隊に移管していた。³⁴⁾ このように、泰緬鉄道の運行については戦時中と変わらず戦後もそのまま日本兵が担当しており、このため泰緬鉄道沿線には数多くの日本兵が配置されていたのである。

また、それ以外の地点についても大半が鉄道関係の労務に従事する日本兵の配置箇所となっていた。表2の未集結の地点のうち、ピッサヌローク以外はいずれも鉄道に関係した労務が行われていた場所であった。このうち、バーンダーラー、ラーチャブリー、ランスアン、ブンピンは橋梁の修復、貨物の積替え、渡船の運行など、輸送の支援を行う日本兵が配置されていた。バーンダーラーでは仮設橋の建設のほか、渡船の運行と連合軍の物資輸送の積替え、通過する日本兵の統制を日本兵が担当していた。³⁵⁾ ラーチャブリーのメークローン川橋梁も戦争末期に被災しており、日本軍が建設した仮設橋も流されていたことから、連合軍では工兵隊を投入して仮設橋を整備する計画を立てていた。³⁶⁾ ラーチャブリーでは1945年9月の時点では仮設橋を貨車が手押しで渡れるようになっていたが、その後11月には再び積替えが必要となっていたことから、日本兵はやはり仮設橋の補修と積替え要員として配置されていたものと思われる。³⁷⁾

33) たとえば、チエンマイでは入院患者約400人の回復を待って逐次鉄道で後送する任務と、兵舎の取り壊しなどの残務処理を行うための残留隊約300人が1946年4月まで残っていた[二輪会 1970: 403-409]。

34) 防衛研 陸軍一中央一部隊歴史全般80「マライ、ボルネオ方面部隊略歴」(JACAR: C12122486700) 1945年11～12月にキンサイヨーク～ニケ間の運行を鉄道第5連隊に移管し、1946年2月にワンポー～キンサイヨーク間を鉄道第11連隊に移管していた。

35) NA BKST 3. 6. 2/12 “Chuan Suwannaro thueng Ho No. O So. 4 So Tho. Thahan. 1946/02”

36) NA BKST 3/14 “Wisawakon Yai Kan Chang Yotha thueng Athibodi Krom Rotfai. 1945/10/30” 橋梁整備を担当するのは第319インド鉄道中隊(319 Indian Railway Coy)であった。

37) NA BKST 3. 4/12 “No. O. Ekkachai namsanoet Set. Tho Yo. 1945/09/20”, NA BKST 3. 6. 2/9 “No Ro. So Ho. Pramot Buranon sanoe Ho No. O So. 4 So Tho. Thahan. 1945/11” 11月6日にラーチャブリーを通過した通訳のプラーモート(Pramot Buranon)の一行は積替えを強いられていたことから、この時点では仮設橋が使えなかったものと考えられる。

ブンピンは南部で最も長大なターピー川橋梁が位置する場所であり、連合軍側はやはり工兵隊を投入して仮設橋を整備する計画を立てていたが、さしあたりは渡船による積替えが必要となっていた。³⁸⁾ なお、バーンダーラーとピッサヌロークには上述した北部からの第2次集結のための中継所が設けられていたことから、これがこの2カ所の日本兵の数を増やしていた可能性が高い。

さらに、他にも少人数ながら日本兵が配置されていた地点が存在していた。表2はそれぞれ1946年3月1日と5月31日時点の日本兵の人数を示した、連合軍側からタイ側に提出された資料に基づいているが、それ以外にも日本兵が労務についていたことが確認できる地点が存在しており、それを反映させたものが図2となる。これを見ると、表2に記載された地点以外では東北部のノーンカーイ、東部のバットンバン、中部下部のナコーンチャイシー、南部のソンクララー、スガイコーロックで日本兵の労務が確認されていたことがわかる。このうち、ノーンカーイ、バットンバン、ソンクララーには連合軍の監視部（Nuai Khoi Het）が設置されており、おそらく1カ所につき7人の日本兵が配置されていたものと考えられる。³⁹⁾ ナコーンチャイシーの日本兵はバンコク～ナコーンパトム間道路にあったターチン川の渡船の運行要員であり、連合軍の命令の下で日本兵が運営に従事していた。⁴⁰⁾ スガイコーロックの日本兵は、1946年5月23日から鉄道用地内で勝手に飛行場の整備を始めた日本兵約150人であった。⁴¹⁾

なお、連合軍は第2次集結地にいる日本兵にも労務を行わせており、タイ国内にいる日本兵の約3分の2が何らかの労務に従事していたことになる。長らく駐タイ日本軍の司令官を務めた中村明人の回想によると、終戦後から1946年3月末までの間に連合軍の労務に従事した者は1カ月あたりのべ約74.6万人、日本兵の生活維持のための労務に従事した者が同じく約130.2万人の計204.8万人であり、これはタイにいる日本兵の65%、集結を完了している日本兵の77%に当たると回想していた。⁴²⁾ とくに、バンコクでは戦争末期に盤谷防衛隊を構成して

38) NA BKST 3/14 “Wisawakon Yai Kan Chang Yotha thueng Athibodi Krom Rotfai. 1945/10/30” こちらの橋梁整備は第629工兵隊（629 Army Troop Engineering）が担当することになっていた。

39) NA BKST 3. 10/7 “Maintenance of Outposts. 1946/06/12” これは1946年6月19日からこれらの地点に日本兵の代わりにイギリス兵かインド兵を派遣するのでタイ側に給養を依頼するよう依頼した文書であり、チエンマイ、ウボン、バーンポーンを含めた計6カ所が対象となっていた。

40) NA BKST 3/61 “Tachin Ferry. 1946/01/05” この道路はバンコクとナコーンパトムを結ぶ唯一の道路であり、南線のターチン川橋梁が破壊された後は鉄道の代替としても重要であったが、まだ建設中の道路の扱いとなっており、ターチン川の渡船もタイ側では運行していなかった。

41) NA BKST 3. 11/15 “Athibodi Krom Rotfai thueng Huana Phanaek O So. 4 Krom Senathikan Thahan. 1946/07/06”, NA BKST 3. 11/34 “Airfield Construction - Sungai Kolok. 1947/02/03” これはスガイコーロック駅構内の鉄道用地内で日本兵が無許可で飛行場の整備を開始したと現地から鉄道局に報告があったもので、連合軍側に問い合わせたところ、飛行場を整備する意図はないと回答があった。

42) 防衛研 陸軍一南西一泰仏印8「駐泰四年回想録 第三編 第十八方面軍時代」 なお、1カ月あたりのべ人数は1日あたりの数に換算すると一桁位が多いが、ここでは原資料の数値をそのまま記載した。

いた第7野戦補充隊を中心に盤谷労務隊が編成されてバンコクとドーンムアンで連合軍の労務に従事しており，末期には1日約4,000人が従事していたという〔田村 1988〕。

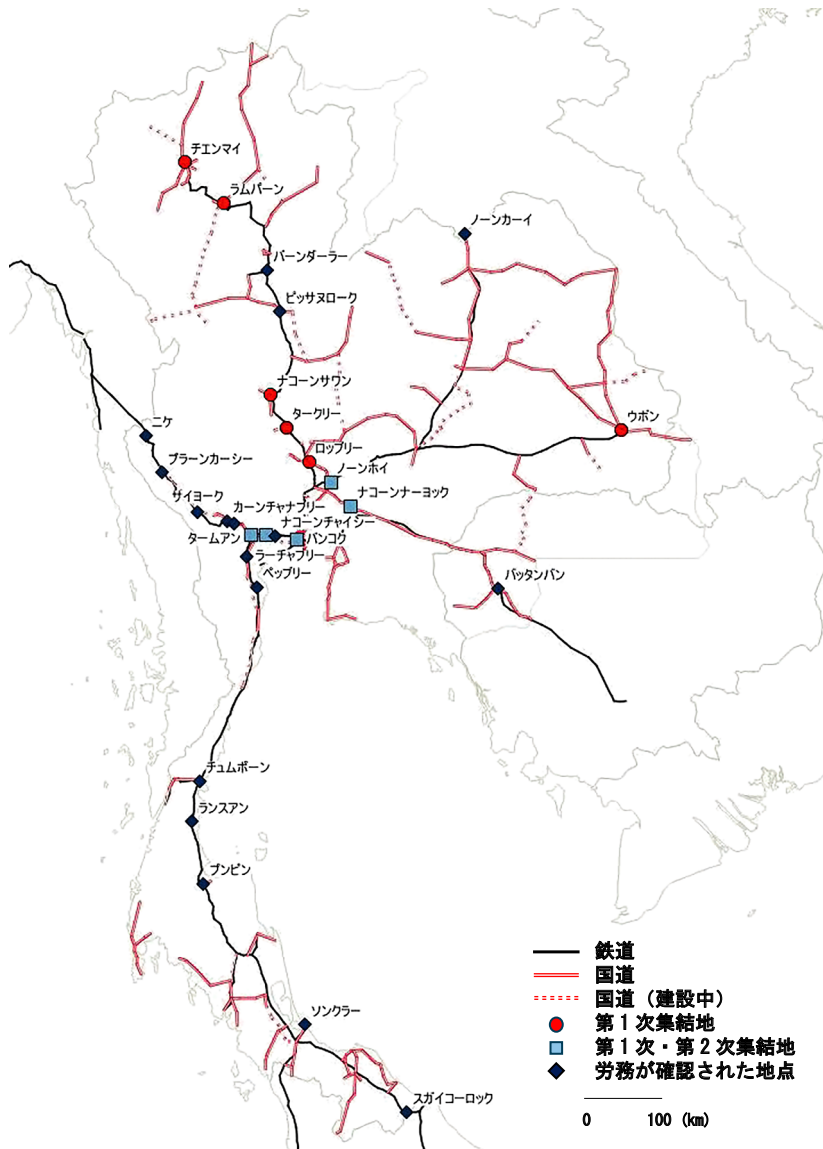


図2 日本兵の労務状況（1946年3～5月頃）

出所：NA BKST より筆者作成。

II 武装解除

1. 日本兵宿営地と武器集積所

武装解除はタイに進駐してきた連合軍の最も重要な任務の1つであった。タイへの進駐を命じられた英印軍第7師団の戦史にも、タイでの任務として、①仏印への進駐のためのドーンムアン飛行場の確保、②連合軍捕虜の搜索と帰還、③日本兵の集結と武装解除、④タイを友好国として扱うこと、の4項目が挙げられていた [Roberts n.d.: 264-265]。このため、日本兵の集結と武装解除は連動して行われ、基本的には第1次集結地に到着した日本兵から順次武装解除を行うことになった。

表3は日本兵の集結と武装解除が行われた地点の宿営地と武器集積所を示したものである。この表の集結地は14カ所となっており、表1の第1次集結地の11カ所とは数が異なっているが、これは第1次集結地に入る前に武装解除のために一旦集結を行った場所が含まれているた

表3 日本兵集結地の宿営地と武器集積所

集結地	日本兵宿営地	武器集積所
バンコク		バーンスー弾薬庫
		陸軍士官学校
		歩兵第2大隊 (バーンスー)
		通信部隊 (バーンスー)
		軍用動物部 (バヤータイ)
		陸軍車両局
		兵站
		陸軍科学局 (バーンケン)
チェンマイ	日本軍駐屯地	チェンマイ陸軍県兵舎
ラムパーン	学校6カ所, クラブ2カ所, 寺院1カ所, 病院1カ所, 事務所1カ所	
ウボン	日本軍駐屯地	ウボン陸軍県兵舎
ナコーンサワン	旧兵舎付近	陸軍第4管区兵舎
タークリー	日本軍駐屯地	警察署
ロブリー	コーククラティアム, カオエーラーワン	歩兵学校
サラブリー	ノーンホイ, ノーンファリン	歩兵第8大隊兵舎
ナコーンパトム	日本軍駐屯地	県学校
バーンボン	日本軍駐屯地	日本軍駐屯地
カーンチャナブリー	日本軍駐屯地	日本軍駐屯地
ベップリー	日本軍駐屯地	陸軍第5管区兵舎
ナコーンナーヨック	日本軍駐屯地	陸軍第2管区兵舎 (プラーチンブリー)
チュムボン	未定	歩兵第38大隊兵舎

出所: NA BKST 3.6/40 より筆者作成。

めである。カーンチャナブリーとペップブリーがこれに該当し、それぞれ武装解除を行った後でバーンポーンの第1次集結地に入ることになっていた。カーンチャナブリーとペップブリーに一旦集結していたのは主に独立混成第29旅団と鉄道部隊であり、泰緬鉄道や南線沿線に点在していた部隊がこの2カ所に集結して武装解除を行い、それからバーンポーンに向かうことになっていた。このような2段階の集結を行った理由は、おそらくバーンポーン集結地の宿舎建設の完了を待ったためであったと考えられ、1945年9月21日付の第18方面軍命令でもバーンポーンに1.2万人を収容する宿舎を建設するよう命じられていた。⁴³⁾ また、同じく表1に含まれていないチュムポーンについては第18方面軍の管轄区域外であったが、南部に展開していた第94師団の一部をこの地で武装解除するために一時的に用いられた集結地であった。

この表3には各集結地における日本兵の宿营地と武器集積所が示されているが、宿营地については原則として日本軍の駐屯地がそのまま用いられていることがわかる。ロッブリーとサラブリーについては地名が記されているが、ロッブリーのカオエーラーワン以外は日本軍が既に駐屯していた場所であった。ラムパーンについても学校など具体的な施設が記されているが、これらの場所もやはり日本軍が以前使用していた場所であった。なお、バンコクについては宿营地が示されていないが、これはバンコクの日本兵1.6万人は武装解除後にロッブリー、サラブリー、ナコーンナーヨックに移転することになっていたためである。

一方、武器集積所については主にタイ軍の施設が指定されていた。バンコクでは計8カ所が指定されているが、これらはいずれもタイ軍の施設であった。複数個所が指定されていたのは品目別に集結場所を分けていたためであり、武器・弾薬は陸軍士官学校、爆弾は弾薬庫が指定されていた。⁴⁴⁾ また、軍用動物部は軍馬などの軍用動物の集積所、陸軍車両局は自動車の集積所というように武器以外の物資の集積所も含まれていた。⁴⁵⁾ これに対し、バンコク以外の場所については原則として現地のタイ軍駐屯地内の兵舎が指定されており、タークリーとナコーンパトムは例外であった。このうち、タークリーについてはタイ軍の駐屯地がないことから警察署を使用し、ナコーンパトムは郊外に空軍の飛行場があったものの、輸送の問題から中心部に近い学校を用いたものと考えられる。⁴⁶⁾ バーンポーンとカーンチャナブリーにもタイ軍の駐屯地はなかったが、日本軍の駐屯地が多数存在していたことからこの2カ所では日本軍の駐屯地

43) NA BKST 3. 10/1 “Kham Sang thi 126 Kongthap Phak thi 18. 1945/09/21”

44) 表3の原資料（NA BKST 3. 6/40）ではバンコクの武器集積所として海軍士官学校が記載されているが、他の資料ではすべて陸軍士官学校となっていることから表3では海軍士官学校の代わりに陸軍士官学校を記載してある。

45) NA BKST 3. 10/1 “Kham Sang Rueang Kan Ruapruam Awut lae Samphara khong Yipun. 1945/09/16”

46) ナコーンパトムでは近隣のナコーンチャイシーにも日本兵がいたことから、ナコーンチャイシーにも2カ所の武器集積所が設置されていた [NA BKST 3. 6. 2/12 “Pho. To. Mo. Lo. Wo. Phakhinai Chakraphan rian Set. Thahan. 1946/02/27”]。

が集積所に指定されたものと考えられる。ちなみに、連合軍側では武器集積所は日本軍の宿营地から2マイル以上離れた場所を用いることを条件としていた。⁴⁷⁾ なお、ナコーンナーヨックについてもタイ軍の駐屯地が存在しなかったが、ここでは近隣のプラーチンブリーのタイ軍の兵舎が指定されていた。このため、ナコーンナーヨックでは武装解除後に武器・弾薬を約30 km 離れた集積所まで輸送する必要があった。

2. 武装解除の実施

日本軍の武装解除は、連合軍の到着後順次実施されていった。1945年9月12日に連合軍は日本軍に対して保有する武器の一覧表の作成と武装解除の準備を始めるよう命じた。⁴⁸⁾ バンコクでの武装解除は9月14日に始まり、18日までは9割の日本兵の武装解除が終了していた[田村 1988: 40]。⁴⁹⁾ バンコク市内のサナムパオ、マタイチ倉庫、獣医学校、第18方面軍司令部に貯蔵してあった武器・弾薬も20日までに集積所への移動が終了し、引き続きバーンオー駐屯地からの移動が続いていた。⁵⁰⁾

地方においては、バンコクから連合軍の将校が到着後に武装解除を行う形態が多く、時期も集結地によって異なっていた。表4は地方での武装解除をまとめたものであり、9月下旬から10月上旬にかけて武装解除を行った場所が多かったことがわかる。最も早かったのはウボンの9月19日であり、連合軍将校のヘッドリーが前日に到着したところ、日本軍がすでに自主的に武装解除を始めていた。⁵¹⁾ サラブリーには9月20日に連合軍が到着し、23日から武装解除が始まっていた。⁵²⁾ ナコーンパトムではオリヴァー (F. Oliver) 少佐が連合軍の進駐前の8月26日に到着していたが、武装解除は9月24日から3カ所で順次行っていた。⁵³⁾

この表には表3の集結地に含まれていないウドーンターニー、ターク、ピッサヌロークの3カ所が含まれているが、これらの場所は戦時中に日本軍が駐屯していた場所であった。ウドーンターニーの場合は現地で武装解除後に集結地に向かわせていたが、タークとピッサヌロークについてはどちらも先にナコーンサワンに集結させてから武装解除を行っていた。この

47) NA BKST 3. 7/19 “Banthuek Kan Sonthana rawang Set. Tho Yo. Kap Phon Chattawa Wilson Brand. 1945/09/17”

48) NA BKST 1. 6/98 “Khao Thahan Chabap thi 1416. 1945/09/14”

49) NA BKST 1. 6/98 “Khao Thahan Chabap thi 1417. 1945/09/18”

50) NA BKST 3. 10/1 “Banthuek Rai-ngan Kan Rapmop Awut Yutthaphan nai Krungthep (Tangtae 20 thueng 24 Ko Yo. 88)”

51) NA BKST 3. 6. 2/9 “Ro. To. Watthana Thammarak sanoe Ho No. O So. 4 Tho Yo. 1945/10/30”

52) NA BKST 3. 7. 1/9 “Khaluang Pracham Changwat Saraburi thueng Ratthamontri Wa Kan Krasuang Mahat Thai. 1945/10/31”

53) ナコーンパトムに通訳として派遣されていたパーキナイ (Phakhinai Chakraphan) によると、彼はオリヴァーに随行して8月26日にバンコクからナコーンパトムに向かい、そのまま1946年2月までナコーンパトムに滞在していた [NA BKST 3. 6. 2/12 “Pho. To. Mo. Lo. Wo. Phakhinai Chakraphan rian Set. Thahan. 1946/02/27”]。

表4 地方における日本軍の武装解除の状況

集結地	月日	状況
チェンマイ	10/05-07	歩兵第11連隊が日本軍の武器を受領し集積所に格納。
ラムパーン	10/08-10	武器を受領して日本兵を宿営地に収容。10日までに完了予定。
ウドーンターニー	9/25	ウボンに集結する前にウィン少佐が日本兵を武装解除し、歩兵第108大隊を受領。
ウボン	9/19	日本側が自ら武装解除を行い、ヘッドリー少佐がタイ軍に引き渡す。今後3～4日以内に完了する見込み。
ターク	9/28-10/01	ナコーンサワンに日本兵411人が到着。スミス少佐が武装解除して集積所に格納。
	10/01-02	ナコーンサワンに日本兵400人が到着して武装解除。
	10/02	ナコーンサワンに日本兵輸送部隊339人が到着して武装解除。
ピッサヌローク	10/01	歩兵第10大隊が戦車8台他武器弾薬を受領。
	10/02	日本兵134人、軍需品1,000箱がナコーンサワンに到着して3日に武装解除。
	10/03	日本兵260人、軍需品1,317箱がナコーンサワンに到着して武装解除。
	10/04	日本兵373人、軍需品1,760箱、食料555袋、石油56袋、平底船2隻がナコーンサワンに到着して武装解除。
ナコーンサワン	10/06	軍需品50両分が到着したが、どこから来たのか不明。
タークリー	10/04	バーネット少佐が周辺の弾薬庫に保管されていた武器弾薬をタークリーに集めて歩兵第64大隊を受領。
サラブリー	9/23	23日に武装解除された日本兵がノンホイ、ケーンコーイに1,000人ずつ入る。
ナコーンパトム	9/24-26	24日はナコーンパトム、25日はラムパヤー、26日はナコーンチャイシーで武装解除。
カーンチャナブリー	9/29	ゴードン少佐と陸軍第5管区司令官が署名し、タームアン以北にあった日本軍の武器弾薬を国道18号線29.8km地点の集積所に集めて受領する。今後歩兵第37大隊が管理。
	10/01まで	タームアン以北の武器弾薬のうち6分の5は集積完了したが、ニケにあった残る6分の1は列車が脱線したため10月12日以降に輸送。
チュムボン	10/28-11/11	鉄道部隊の武器はタイ側が受領したが、地上部隊の武器は引き渡されず。

出所：NA BKST 2. 1/12, 3. 6. 2/4, 3. 6. 2/9, 3. 7. 1/1, 3. 10/1 より筆者作成。

うち、ウドーンターニーの日本兵はウボンに集結する第22師団の歩兵第85連隊第1大隊であり、9月23日に到着したウィン少佐が日本側と交渉を行い、先に武装解除を行ってからウボンに向かうことで合意していた。⁵⁴⁾ 一方、タークとピッサヌロークの日本兵は第4師団の一部であり、ナコーンサワンに部隊が到着次第、随時武装解除を行っていたことがわかる。

ナコーンサワンでの武装解除の際には事前に引き渡す武器弾薬の一覧表の作成が行われていなかった可能性が高いが、通常はあらかじめ日本側が引き渡す武器・弾薬の一覧表を作成しておき、武装解除の際には連合軍とタイ軍の担当将校が一覧表と実際に引き渡される武器・弾薬

54) NA BKST 3. 7/15 “No. O. Sombun Krabuanrat sanoe Kho No. 1945/10/10”

の量を確認した上で受領していた。ナコーンパトムで実際に武装解除を担当した第33師団歩兵第213連隊乗馬小隊の伊藤雄一郎は以下のように回想していた〔歩兵第二百十三聯隊戦誌編さん委員会 1982: 1143〕。

私は昭和19年6月以来、聯隊本部兵器主任をしていた関係で、終戦後も兵器の管理に携わっていた。収容所生活1か月後のある日、連合軍監督官オリバー少佐よりいつでも武器を引き渡せる体制を整えておく様命令が出た。私は河原聯隊長と打ち合わせ、本部、各中隊の一切の兵器弾薬を一棟に集め整頓した。夜間住民による盗難のおそれが強かったので、衛兵所を設けて警戒した。毎日毎日衛兵交代時に同じ注意を繰り返す単調な幾日かが過ぎ、早く引き取ってくれぬかと毎日が苦勞になってきた。……そうするうち返納命令が出た。品目数量表3部を作り2部を連合軍に提出し、指定された建物内にトラック輸送することになった。車上監視のため必ず将校1名を乗車させよという、すべてが厳しい。当日の分担等を計画しその日を待った。3日前念のため数量の再確認を行ったところ、提出した数量表より機関銃弾が千五百発程多い。数量表と一致しなくては悪いと思い、夜暗に齋藤准尉と穴を掘り埋めた。翌日更に点検したところ、どうした間違えか今度は五百発足りない。又夜を待ち昨夜埋めたのを掘り返した（住民に見られ通報されるのをおそれ夜暗に行った）。簡単なことの様だが、この外にも関係者以外にはわからぬ苦勞をした。いよいよ当日予定の手順に従い、1日ばかりで平穩裡に完了した時はほっとしたと同時に疲れが出た。

日本軍の武装解除が終わると、連合軍の捕虜の扱いとなる日本兵はタイ軍の統制下に置かれることになっていた。このため、タイ軍は宿営地と集積所の警備のために部隊を配置することになった。当初の配置状況の詳細は不明であるが、連合軍側は1945年9月21日の時点でチエンマイ、バーンポーン、ナコーンパトム、ナコーンナーヨックには日本兵が数多く集結するのでナコーンパトムは2個大隊、それ以外は3個大隊ずつ配置するよう求めていた。⁵⁵⁾ これを受けて、少なくともナコーンパトムとバーンポーンには連合軍の指示通りに部隊を配置していた。⁵⁶⁾

その後、1945年12月に入って部隊の移動を行っており、移動後の状況を示したものが表5となる。この表の時点ではナコーンパトムとバーンポーンは1個連隊で警備することとなっており、9月の時点よりも配置された部隊数は減少したことが分かる。それ以外には2個大隊が配置されているバンコクと連隊が派遣されて2カ所ずつ管理している事例を除き、1カ所につ

55) NA BKST 3, 7/12 “Pho. Tho. Carter thueng Krom Banchakan Kongthap Thai. 1945/09/21”

56) NA BKST 3, 7/25 “Kham Sang Chapho Rueang Khluen Yai. 1945/09/22” バーンポーンには海軍の部隊を2個大隊派遣していた。

表5 宿营地・集積所警備のためのタイ軍の配置状況（1945年12月）

集結地	集積所数	警備部隊
バンコク	7	歩兵第3, 9大隊
チエンマイ	1	歩兵第31大隊
ラムパーン	1	歩兵第30大隊
ウボン	1	歩兵第27大隊
ナコーンサワン	1	歩兵第12連隊（司令部、直属部隊、歩兵3個大隊）
タークラー	1	
ロップリー	1	歩兵第6大隊
サラブリー	1	歩兵第8大隊
ナコーンパトム	1	歩兵第2連隊（司令部、直属部隊、歩兵3個大隊）
バーンポーン	1	
ペップリー	1	歩兵第45大隊
ナコーンナーヨック	n.a.	歩兵第5連隊（司令部、直属部隊、歩兵3個大隊）
プラーチンブリー	1	
チュムポーン	1	歩兵第38大隊

出所：NA BKST 3. 6/40 より筆者作成。

注：ナコーンナーヨックの集積所数については原資料に記載がない。

き1個大隊の配置となっていたことが確認できる。ただし、この時期は第2次集結地への移動が始まっていることから、タイ軍による警備が必要な地点はこの後着実に減少していったはずである。なお、南部での武装解除についてはマラヤの英印軍第25師団が管轄し、南部の第94師団の弾薬庫を接收の上で、ナコーンシータマラートのタイ陸軍第6管区に引き渡されることになった。⁵⁷⁾

3. 武器・弾薬の処分

武装解除後に日本兵宿营地と武器集積所の管理はタイ軍の任務となったが、集積所に保管されていた武器・弾薬の所有権は連合軍にあり、連合軍がその処分を進めていくことになった。この作業は日本兵の集結に比べれば緊急性が低いことから、全体的にその進行は遅く、最終的にすべての武器・弾薬を処分できなかった。

ナコーンパトムでは、1945年11月初めに英印軍の1個中隊が来てタイ軍が管理していた集積庫を受領して武器・弾薬の処分を始めた。⁵⁸⁾ 連合軍側は使用可能な武器は自動車でバンコクに輸送し、使用不可能なものは現地で破壊して屑鉄として売却し、修理可能なものは1946年2月末現在でもそのまま保管されていた。また、ラーチャブリー、ペップリー、プラチュアアップ

57) NA BKST 3. 10/1 “Adam Wilson Brand thueng Bo Ko. Tho Yo. 1945/10/23” 表5のチュムポーンは南部に位置しており、歩兵第38大隊は第6管区の下に置かれていた。

58) NA BKST 3. 6. 2/12 “Pho. To. Mo. Lo. Wo. Phakhinai Chakraphan rian Set. Thahan. 1946/02/27”

キーリーカン、チュムボーンの日本軍の弾薬庫に保管されていた武器・弾薬も搬出し、一部は現地で焼却処分したという。⁵⁹⁾ 12 月初めにこの部隊がバンコクに戻った後は、再びタイ軍が管理を引き継いでいた。北部の武器・弾薬もバンコクに輸送する必要があったが、日本兵の第 2 次集結を優先させたことと、鉄道輸送力の問題があったことから、武器・弾薬の輸送は遅れていた。1946 年 1 月の時点でも、北部からの日本兵の出発は武器・弾薬の管理要員を除いて 15 日までに終わる予定であるものの、武器・弾薬の輸送は依然として継続中という状況であった。⁶⁰⁾ なお、ウボンとタームアンからは連合軍将校がオランダ兵に供与した武器・弾薬がバンコクへと輸送されていた。⁶¹⁾

不要となった武器・弾薬の処分方法は、海上投棄が中心であった。1945 年 11 月 28 日にはイギリス将校 2 人がインド兵を率いて木造船 2 隻に武器・弾薬を積んでメークローン川を下って河口付近で投棄していた。⁶²⁾ 英印軍側によると、この月には 1,400 トンの武器・弾薬が海上投棄されたとのことであった [Prasad n.d.: 252]。12 月 6 日にはバンコク南方バーンナーにあるチャオプラヤー河畔にある海軍兵器局 (Krom Sapphawut) に連合軍将校 2 人を乗せた艇が到着し、保管されていた日本軍の爆弾、手榴弾、拳銃、銃剣などを積み込ませていた。⁶³⁾ このような海上投棄はタイに限らず、他地域でも一般的に行われていた。⁶⁴⁾

武器・弾薬の処分は、1946 年半ばまで続いていた。1946 年 5 月の時点でも、プラチュアップキーリーカンからバーンボーンへ向けた日本軍の武器の輸送が行われていた。⁶⁵⁾ 1946 年 7 月にはバーンボーン集積所の武器・弾薬約 600 トンの処理を行うこととなり、18 日から開始されることになった。⁶⁶⁾ これらの武器・弾薬はトンブリーまで列車で輸送され、そこから船でチャオプラヤー川を下ってタイ湾に出たところで投棄されることになり、1 日 1 列車で 160 トンずつ輸送する計画であった。この輸送には当時作業隊として残っていた日本兵 260 人を用い、5 日ごとに交代させる予定であった。⁶⁷⁾

このように武器・弾薬の処分は日本兵の作業隊を用いて行われていたが、最終的に日本兵の

59) NA BKST 3. 6. 2/12 “Pho. To. Mo. Lo. Wo. Phakhinai Chakraphan rian Set. Thahan. 1946/02/27”

60) NA BKST 3/42 “Pho. Tho. Kho. Suthat rian Rong Set. Tho Bo. 1946/01/11”

61) NA BKST 3. 10/1 “Ro. O. Phit Achonbun rian Pho. O. Net Khemayothin. 1945/10/18”

62) NA BKST 3. 10/7 “Arms and Ammunitions Brought back from the Sea. 1946/04”

63) NA BKST 3. 10/2 “Jap Armaments Handed over to Allied Officers. 1945/12”

64) 例えば、ボルネオ島以東の濠北地域を管轄していた第 2 軍の武装解除においても日本製の武器・弾薬の大半は海没処分されており、スマトラ島を管轄していた第 25 軍でも武器弾薬の処理は爆破や水没によって行われていた [厚生省引揚援護局史料室 2010: 43]。

65) NA BKST 3. 6. 2/14 “Pho. To. Prayat Achonphut rian Set. Thahan. 1946/05/13”

66) NA BKST 3. 6. 2/14 “Rueang Kan Thamlai Awut Yutthopakon Yipun chak Khlang Ban Pong. 1946/07/09”
バーンボーン集積所はノンブレードック駅の南にある旧日本軍の駐屯地に建てられた倉庫であり、オクタゴン倉庫と呼ばれていた。

67) NA BKST 3. 6. 2/14 “Rueang Kan Thamlai Awut Yutthopakon Yipun chak Khlang Ban Pong. 1946/07/09” 260 人のうち 100 人は泰緬鉄道の運行に従事する日本兵で、160 人はバンコクでの作業に従事している兵であった。

帰還が完了するまでにすべての作業が終わらず、タイ側に残務処理を任せた場所も存在した。英軍は1946年10月16日付で、ナコーンサワンの日本軍の武器・弾薬の処分をタイ側に任せることに決めたため、管理している現地のタイ軍部隊に伝えるよう求めていた。⁶⁸⁾最後の日本兵がタイを離れたのは10月31日であったことから、結局日本兵を用いての武器・弾薬の処分は時間切れとなってしまったのである。⁶⁹⁾

なお、一部の日本兵は武装解除が行われる前に自ら武器・弾薬の処分を行っていた。例えば、ロップリーでは1945年8月22日の時点で日本軍が駐屯していたコーククラティアム飛行場で不要となった物資、武器、自動車を焼却処分していた。⁷⁰⁾ウボンでも8月29日の時点で武器を焼却したり川に捨てたりして処分しているとの報告があった。⁷¹⁾さらに、武器を住民に売却していた事例もあり、ウボンからも武器が安価に住民に売却されていると報告されていたほか、チャイナートでもおそらくタークリーにいる日本兵が武器や物資を住民に売っており、警察が購入者を捕まえているとの報告があった。⁷²⁾このような武器の住民への横流しは、強盗を増やして日本軍や連合軍の物資にさらなる被害を与えることにもなった。

III 集結と武装解除の問題

1. 輸送

このように日本軍の集結と武装解除が行われてきたが、約12万人に及ぶ日本兵を特定の箇所に集結させて、彼らが所持していた武器を没収して武装解除を行うということは非常に大きな負担をタイ側に強いることになり、様々な問題を浮上させてきた。ここではその中でも輸送、宿舎、窃盗・強盗に焦点を当てて、順に検討していく。なお、給養も大きな問題であったが、これについては別稿にて取り上げる。

まず大きな問題となったのは、日本軍の輸送であった。日本軍は戦時中からタイ国内で部隊の移動を行っており、とくに戦争末期にそれは活発化していた。他方で、日本軍が最も依存していた鉄道は連合軍の空襲によって各地で寸断されており、鉄道輸送力は戦争末期に大幅に低下していた。南線ではナコーンチャイシーのターチーン川橋梁、ラーチャブリーのメーク

68) NA BKST 3. 10/7 “Destruction Jap Weapons. 1946/10/16”

69) バンコクから最後の引揚船が出航したのが10月28日であり [田村 1988: 48]、10月31日に南部スラータニーで渡船を運行していた日本兵が労務を終了したことでタイ国内から日本兵がすべて引き揚げた [NA BKST 3. 5/28 “Kham Thalaeng khong Ratthamontri Wa Kan Krasuang Kan Tang Prathet To Sapha Phuthaen. 1946/10/31”]。

70) NA [2] So. Ro. 0201. 85. 5/4 “Khaluang Pracham Changwat Lopburi thueng Ratthamontri Wa Kan Krasuang Mahat Thai. 1945/08/22”

71) NA BKST 3. 7/2 “Phon. To. Pho. Hansongkhrum thueng Mo Tho. Tho Bo. 1945/08/29”

72) NA BKST 3. 7/15 “No. O. Sombun Krabuanrat sanoe Kho No. 1945/09/27” タークリーの日本兵は食糧の調達のために西に約30 km離れたチャイナートを頻繁に訪れていた。

ローン川橋梁が被災したことで、末期には日本軍の軍用列車はおおむねトンブリー～ナコンチャイシー間、ナコンチャイシー～ラーチャブリー間、ラーチャブリー～チュムポーン間でそれぞれ1日1往復ずつ運行されており、他に泰緬鉄道から直通してくる列車がノンブロードゥック～ナコンチャイシー間に1日1往復存在した〔柿崎 2018: 83-84〕。北線ではバーンダーラーのナン川橋梁を始めとして各地で橋梁が破壊され、バンコク～バーンダーラー間では軍用列車の運行がほぼ止まっていた〔同上書: 86〕。⁷³⁾ 他方で、橋梁の被害がほとんどなかった東線では、バンコク～プノンベン間を直通する1日1往復の軍用列車が終戦まで運行されていた。

このような日本軍の軍用列車は、1945年9月半ばまでは戦時中と同じく運行されていた。日本側から提出された「軍用列車運行予定表 (Banchi Sadaeng Krabuan Rot sueng cha Chat Hai Chaonathi Fai Thahan Yipun)」は9月13日分まで存在しており、少なくともこの日までは戦争末期と同じ頻度で軍用列車が運行されていたことが分かる。また、タイ側が作成した請求書によると、日本軍の軍事輸送は9月19日まで毎日続いていたことが確認できる。⁷⁴⁾ 9月12日に連合軍が日本軍に対してバンコクから北方および東方への移動や輸送を禁止する旨を命じたこと、また15日に日本軍の軍事輸送を中止したとの文書があることから、おそらくはこの時期に日本側の要請による軍用列車の運行と軍事輸送が中止されたものと考えられる。⁷⁵⁾

このため、これ以降の日本軍の集結にかかわる鉄道輸送は、一般列車あるいは連合軍の要請に基づいて運行された特別列車で行われることになった。連合軍の特別列車に関する情報は限定的であるが、上述したように9月23日からバンコクの日本兵を移動させる際にはタイ側に対して特別列車の運行を依頼していた。⁷⁶⁾ また、10月22日には南部のスラターニーからマラヤのスガイパッターニーへ向けて日本兵と物資を輸送するとして、連合軍側が鉄道局に対して南部ハートヤイの担当者がバンコクからの命令を受けずに特別列車の手配をできるようにしてほしいと要請していた。⁷⁷⁾ これは南部の第94師団の日本兵をマラヤに集結させるための輸送の依頼であった。

73) 時期によっても異なるが、1945年4月の時点では北線で鉄道輸送が利用可能であったのはサワンカローク～チエンマイ間のみとなっていた。

74) 請求書は9月19日分まではほぼ毎日分存在するが、その後は9月24日の輸送が1区間分のみ存在するだけであることから、9月19日が実質的な日本軍の軍事輸送の最終日と見なすことができよう。

75) NA BKST 3/14 “Khamasang Rueang Kan Chai Rotfai khong Yipun. 1945/09/16”, NA BKST 3. 11/5 “Pho. O. Insorasan rian Set. Tho Yo. 1945/09/16”

76) ただし、実際には列車での移動は傷病兵と衛生兵に限られていたようであり、徒步行軍によって移動した日本兵も存在していた。例えば、野戦高射砲第36大隊の大出莊蔵はバンコクからロップブリーまで何日かけて線路沿いを徒步行軍したと回想している〔南友会回想録編纂委員 1976: 335〕。

77) NA [2] SR. 0201. 98. 4/10 “Krasuang Khamanakhom Krom Rotfai.” スガイパッターニーは第94師団の一部部隊の第1次集結地となっていたようであり、この師団の隷下にあった歩兵第257大隊第1大隊は終戦時にクダー州内に展開していたが、9月上旬から約2カ月間この地に置かれていた〔楓三大隊編集委員会 1988: 289〕。

このように日本軍の集結の際の輸送は各地で行われたが、最も大きな問題は第2次集結の際の北部からナコーンナーヨック方面への移動であった。この第2次集結でチェンマイやラムパーンの日本兵約2.7万人を南下させる必要があったものの、北線の輸送力が著しく低い状況であったことから、同じ時期に行われていたタイ軍の帰還を妨げることになった。北線のサワンカローク～チェンマイ間は山岳区間のため通常でも1列車につき貨車10～12両程度しか牽引できなかったが、この間で使用する機関車が4両も故障しており、かつバーンダーラーのナーン川橋梁が被災したために他線区から機関車を補充することも不可能であった。⁷⁸⁾ 戦時中にシャン州に進軍していたパーヤップ軍を構成していたタイ軍の部隊の多くは東部や東北部から来ていたことから、終戦後に彼らを帰還させる必要があったものの、日本軍の集結を先に完了させるためにタイ軍の帰還も見合わせるようになった。⁷⁹⁾ このため、タイ軍の帰還は11月からしばらく中断され、1946年1月末の時点でも何千人ものタイ兵がバーンダーラー付近で待機しているような状況であった。⁸⁰⁾

しかしながら、タイ軍の帰還を中断しても依然として北線の輸送力は足りず、結果として大勢の日本兵が北部からの徒歩行軍を強いられることになった。例えば、第4師団を構成する歩兵第8連隊の主力は11月15日にラムパーンを発ち、ナコーンサワンまで徒歩行軍してから列車でナコーンナーヨックへ向かっており、第4師団通信隊は翌日ラムパーンを発って主力は徒歩行軍で、傷病兵は列車で12月15日にナコーンナーヨックへの集結を完了していた。⁸¹⁾ この歩兵第8連隊の徒歩行軍について、歩兵第8連隊の戦史は以下のように回想している〔歩兵第八聯隊史編纂委員会 1983: 586-587〕。

聯隊主力（II 欠）は、11月14日午後、師団長より「師団の第1梯団となって、明日中に出発するように」と命令を受けた。予告なしの突然の命令である。勿論、理屈をいえば、既に終戦直後に英軍から「何時でも出発出来るように準備しておけ」と命令は出されてあった。その命令を根拠として3ヶ月目に、「翌日出発」と発令した訳である。これが英軍式の人使いかも知れない。

78) バーンダーラーのナーン川橋梁の被災後は、バーンダーラー以北の列車とサワンカローク支線の列車を直通で運行しており、山岳区間であることから1列車あたり貨車10～12両に制限されていた〔NA BKST 2. 4. 3/7 “Banthuek Kan Sonthana Kiaopkap Rotfai. 1945/07/19”〕。平時でも、バンコクからの列車はウッタラディットで2～3列車に分割して運行されていた。連合軍側はこの間に故障している機関車が4両あるとして、タイ側に対して至急修理して使用可能にするよう求めていた〔NA BKST 3. 11/18 “Ro. O. Phit Achonbun rian Set. Tho Yo. 1945/10/17”〕。

79) NA BKST 3/42 “Phon. Tho. To. Prasit-yutthasin thueng Phon. To. So. Saranuchit. 1945/11/15” パーヤップ軍を構成していた部隊のうち、第2師団は東部ブラーチーンブリー、第3師団は東北部のコーラートから来ていたことから、それぞれ元の所属に帰還させる必要があった。

80) NA BKST 3. 62 2/12 “Chuan Suwannaro thueng Ho No. O So. 4 So Tho. Thahan. 1946/02”

81) 防衛研 陸軍一南西一泰仏印1「泰方面部隊史実資料綴（完）（帰還者報告）」

聯隊主力の兵員の中には、退院したばかりで徒歩行軍の出来ない傷病者が可成り多数配属されていたので、それらの健康状態を考慮し、先ず、行軍に耐えられる者と汽車輸送によるものを区分し、その区分毎に移転準備と宿舍の清掃を行わせた。殆ど徹夜で準備を終り、15日正午、「ランパン」を出発した。

終戦後3ヶ月間、1日として集団行動も訓練も許されなかったためと、当日は可成り暑かったことで、宿舍を出発する以前から喝病で倒れる者が出始め、行軍開始後も続いた。已むなく臨時にトラック1台の配属を要請し、それらの患者を収容し護送を反復して、行軍した。初日の行程は夕刻迄に20軒進んで終わった。

2日目からは初日の教訓をいかし、夜半出発、1日の行程を2〜30軒とし、炎暑の時刻以前に行軍を終了することにした。その後、日が経つに従い体も馴れ順調に進むようになった。

この行軍は、メナム河に沿った道を南下し、約1ヶ月かかって目的地「ナコンナヨーク」に到着した……。

このように、鉄道輸送力の不足はタイ軍の帰還を遅らせたのみならず、日本兵にも1カ月にわたる徒歩行軍を強いることになったのである。

2. 宿舍の建設

日本軍の集結地は原則として日本軍の駐屯地をそのまま用いたことから、集結地における宿舍の建設も日本側が行うことになっていた。第1次集結地にせよ第2次集結地にせよ、既存の日本軍の駐屯地にある宿舍では不足することから、集結に先立って日本側が宿舍の建設を行う必要があった。1945年9月21日の第18方面軍命令では、ナコーンナーヨックに1.8万人分、バーンポンに1.2万人分、チェンマイに9,000人分など各集結地で大規模な宿舍建設を行い、27日までに完成させるよう命じていた。⁸²⁾

集結用の宿舍建設自体をタイ側が行う必要はなかったものの、タイ側に課されていたのは建設資材の調達と提供であった。タイ側ではそのために資材調達の手順を定め、日本側から必要な資材の品目、数量、価格が現地のタイ軍代表か県知事に提出されると現地の連合軍担当者と検討して必要最低限の量に調整した上で日本側に結果を伝え、日本側にその場で支払いを求めるかもしくは納品書に受領印を受ける形で引き渡すこととした。⁸³⁾ なお、立替払いの場合は平和維持部 (Kong Amnuai Kan Santhiphap) に申請の上で平和事業費 (Ngoen Ngan Santiphap) から

82) NA BKST 3. 10/1 “Kham Sang thi 126 Kongthap Phak thi 18. 1945/09/21”

83) NA BKST 3. 7. 1/1 “Pho. O. Hiran Patthamanon song Phu Thaen Fai Thahan Pracham So. Ro. So. 1945/10/05”

支出することにした。⁸⁴⁾

実際にどの程度の資材調達をタイ側に求めたのかを確認できる事例は少ないが、例えばウボンでは宿舍の補修のために竹2万4,562本、竹壁1万3,120枚、萱9万9,295束を調達し、計8万4,357.01パーツを支出していた。⁸⁵⁾ 1945年10月10日の時点で、連合軍将校のヘッドリー少佐が県知事に竹や萱などの資材の調達を求めたのに対し、県知事は日本軍が住民から高値で買い入れているので調達が難しいと回答していたことから、ウボンでは日本側による調達とタイ側による調達が同時に行われていたことが分かる。⁸⁶⁾

また、日本軍の集結地を警備するタイ軍の宿舍を確保する必要があると、とくに通常タイ軍が駐屯していない場所では新たに宿舍を整備しなければならなかった。例えば、日本兵の第2次集結地となったナコンナーヨックでは平時にタイ軍は駐屯しておらず、集結地の警備に当たっては当初近隣の寺院の軒先を借りて仮設宿舍として用いていた。⁸⁷⁾ タイ側はこの地を警備する歩兵第5連隊のための兵舎建設を計画していたが、1946年に入って連合軍が日本兵を10月までに帰還させることを決めたことから、結局4月になって兵舎整備を中止していた。⁸⁸⁾ ただし、日本兵が完全に退去するまでは警備をそのまま続けなければならないことから、仮設宿舍の補修を行っていた。

第1次集結の際にはあらかじめ各集結地別に宿舍を整備するよう命令が出されていたものの、実際には期限内に大人数を収容する宿舍を整備することは難しく、到着した日本兵が自ら宿舍を整備することもあった。1945年12月にナコンナーヨックに到着した歩兵第8連隊は、以下のように宿舍の整備を行っていた〔歩兵第八聯隊史編纂委員会 1983: 588〕。

聯隊主力は、12月中頃に、第2大隊は約1ヶ月おくれて、「ナコンナヨーク」収容所に到着した。

収容所とは名のみで、到着部隊は密林内で居住地域を割当てられ、その地域内に自力で密林を切り開き、居住設備を造らなければならなかった。

最初は密林内に露営しながら、小さな町造りの構想の下に、各隊に地区を配当し密林を

84) 平和維持部は連合軍との連絡業務のために、終戦後に大軍司令部 (Kong Banchakan Thap Yai) 内に設置された機関である。1945年8月31日付で日本軍との連絡業務を担ってきた同盟国連絡局 (Krom Prasan-ngan Phanthamit) が廃止されると、その要員と業務は平和維持部第3課に移管されたことから、軍が関係する戦後処理を一手に引き受ける機関となった。平和事業費は連合軍兵や日本兵の接待、給養、便宜供与などの費用を賄うために立てられた予算であり、陸軍財務局 (Krom Kan Ngoen Thahan Bok) が管理した。なお、大軍司令部は1944年8月に軍最高司令官 (Phu Banchakan Thahan Sungsut) を廃止して新たに大司令官 (Maethap Yai) を設置した際に、その司令部として設置されたものである。

85) NA BKST 3. 7. 1/8 “Pho Bo. Phon. 37 thueng Mo Tho. Tho Bo. 1945/11/22”

86) NA BKST 3. 7/15 “No. O. Sombun Krabuanrat sanoe Kho No. 1945/11/12”

87) NA BKST 3. 12/16 “Pho Bo. Monthon. 2 thueng Set. Thahan. 1946/05/18”

88) NA BKST 3/42 “Phon. Tho. So. Senanarong thueng Pho Bo. Monthon. 2. 1946/04/23”

伐採し、マラリヤ蚊予防のため周囲一定区域に重油を撒布し焼却することから開始されたが、約2ヶ月程の間に、兵舎を建て、道路を作り橋を架け、井戸を掘るなど居住設備は一応出来た。野球場も、簡単な野外劇場も出来た。ジャングルが一変して文化の町になった。無の中から有を作り出した将兵の智恵と汗の結晶であった。各隊は思い思いに地名（聯隊は朝日村）をつけていた。

……整地を終わった場所に、日照、通風、排水の便などを考慮して、柱には青竹、屋根はニッパ椰子の葉、壁はアンペラと椰子の葉、床は縦割りの竹のささら敷きなどと必要材料を準備しておいて、人海戦術の分担作業で1日で建ててしまう。炊事場も別に作る。便所も掘って設ける。見事な早業であった。

3. 窃盗・強盗の頻発

日本軍の集結に伴うもう1つの大きな問題は、日本軍の物資を狙った窃盗や強盗の発生であった。すでに戦時中から日本軍の物資を狙った窃盗や強盗は増えており、とくに物資不足が顕著となった戦争末期にその数は急増していた〔柿崎 2022: 278-426〕。戦争が終わっても物資不足は改善されず、さらに武装解除によって日本兵が丸腰となったことで、日本軍の集結地は盗賊の格好の餌食となった。その結果、集結地における窃盗や強盗は戦時中よりもさらに頻発していったものと考えられる。

終戦後タイで過ごした日本兵の回想の中で、「カモイ（盗賊）」という語に言及している人は少なからず存在するが、第2次集結の開始後もチェンマイに残留した第2野戦輸送隊の木村雄吉は以下のように回想していた〔二輪会 1970: 410-411〕。

とにかく武装解除された後なので残留隊の装備といえば、ブローニング拳銃2挺と小銃3挺ぐらいのものだった。それを衛兵所に保管して置いたが、現地人の悪い奴等がそれをねらって夜間よく来襲してきた。タイ国では泥棒のことをカモイと呼んでいたが、そのカモイが夜の1時から2時頃よくおそってきた。

まず衛兵所に石や煉瓦を投げてくる。衛兵が非常呼集の鐘を乱打して、全員起床をかける。ねていた連中はとび起き、衛兵所前に集合して戦闘隊形を取る。ただし武装解除後のことなので竹槍をもって集まるにすぎない状態だった。ばらばらと石が降ってくる。月明かりにすかして見ると、カモイどもは長い日本刀のようなダー（鉞）を持って衛兵所前を駆け回っている。

連合軍命令で、日本軍営内で盗賊を殺傷した場合は、罪に問われないが、一步でも営外の場合は法にふれるとのことなので、営門外で現地人がどんな挑発的な言動に出てもどうすることもできない。歯を食いしばって我慢した。正門で彼らががががやしているうちに、

裏の塀を破って炊事場に侵入し、醤油のかめを相当数もっていかれたことがあった。ある夜などは岩村隊長が、拳銃を2、3発ぶっ放して、彼等を退散させた一幕もあった。

連合軍側も日本軍の物資を狙った盗賊には頭を悩ませていた。第1次集結が始まったばかりの1945年9月の段階で、日本軍が連合軍に引き渡すために集結させた物資の保管庫を狙った盗賊が絶えず、日本兵に発砲を禁止したことで盗賊がますます大胆になっているとした上で、地方の日本兵には数を制限して武器を持たせるとともに、防衛のための発砲を許可せざるを得なくなるとタイ側に伝えていた。⁸⁹⁾ 実際に、連合軍側は同じ時期にチエンマイ、ラムパーン、ナコーンサワン、ペップリー、プラチュアップキーリーカンの弾薬庫を警備する日本兵に対して、強盗に対して発砲する許可を与えていた。⁹⁰⁾

また、武装解除後に処分した日本軍の武器・弾薬が窃盗の対象となることもあった。上述したように1945年11月28日に連合軍将校がメークローン川を下って河口付近で武器・弾薬の投棄を行ったが、この時には弾薬は河口に着く前から投棄を始め、銃は河口付近で投棄を行ったものの、水位が下がってからこれらを取得した者がいたとタイ側が連合軍側に対して通報していた。⁹¹⁾ このような武器・弾薬の取得は危険を伴うものであり、ドーンムアン飛行場付近でも住民が旧日本軍の駐屯地で弾薬や爆弾を拾って解体している最中に爆発して負傷したり死亡したりする事故が後を絶たず、タイ空軍の病院に運び込まれて治療しなければならない事例が増えていた。⁹²⁾

さらに、集結所や集積地の警備のためのタイ兵が窃盗を行う例も後を絶たず、連合軍側から警備のタイ兵を退去させるよう求められることもあった。例えば、1945年10月にはバンコクの獣医学校向かいの集積地を管理していたタイ兵が窃盗を行っているとして連合軍側から退去を求められ、代わりにオランダ兵に警備を任せるとしていた。⁹³⁾ また、11月10日の21時頃にバーンポーンの集結所に武器を持った盗賊約50人が入り込んで小銃1丁、毛布66枚、蚊帳12張などを奪ったが、連合軍が調査したところ彼らはすべて警備を担当しているタイ海兵隊であったことが判明した。⁹⁴⁾

第2次集結時に北部からの日本兵の移動の中継点となっていたピッサヌロークに開設された患者療養所で働いていた第26野戦防疫給水部の池田政三は以下のように回想している〔貝塚1972: 276〕。

89) NA BKST 3. 4/7 “Phon. Tho. Cho. Mo. Sinat-yotharak song So Ro So. 1945/09/24”

90) NA BKST 3. 6/20 “Protection of Arms Dumps. 1945/09/24”

91) NA BKST 3. 10/7 “Arms and Ammunitions Brought back from the Sea. 1946/04”

92) NA BKST 3. 6/16 “No. O. So. Rasanon sanoe Ho No. O So. 4 To Yo. 1945/09/26”

93) NA BKST 3. 10/2 “Phon. Tho. Phra Sinlapasatrakhom thueng Prathan Kammakan Kan Plot Awut. 1945/10/10” これはおそらく表3の軍用動物部のことであると思われる。

94) NA BKST 3. 8/4 “Preliminary Report on Incidents at Banyang Camp (Kato Butaly) Nong Pla Duk Ry Sta (Sq 1723 Map D 47 P/3) on 10 Nov. 45”

……ここでは盗難事件が頻々と起こっていました。その為にタイ軍の警備隊が1ヶ分隊づつ交代で常駐しているのですが、これも怪しいのです。来る時は手ぶら同然なのが帰る時は、日本の靴を履き雑嚢は丸々とふくれ上がっているし毛布まで持って出ていくのです。買い取ったものか盗んだものか判ったものではありません。

こんな事もありました。私が発着室の前で不寝番に立っていた時、前の道路を現地人が再三行き来するので変だと思い警戒していたのですが間もなく衛兵所がさわぎ出したのです。ガソリン（ドラム罐）が大量に盗まれたというのです。丁度衛兵所から百米あるなし、私の位置からも程遠からぬ叢の中に集積してあったのです。ドラム罐を転がしていた数人組を動哨が発見したのです。カモイ達は暗闇に紛れて逃亡したのですが、叢が倒れていて転がした跡が歴然と残っておりこれを辿って行くと壕を越えかなり離れた所のタイ航空隊へ運び込んだ形跡がある、と云うことでした。なんとも大がかりなカモイ団であったのです……。

このように、警備のタイ兵による窃盗も後を絶たず、日本軍の集結地や集積所はさながら「取り放題」の場となっていたのである。タイにおける日本兵の集結と武装解除に際して、連合軍側はマクロなレベルではタイ側の協力が得られたことで円滑に進んだと評価していたものの、実際にはミクロなレベルでタイ側官憲による私利私欲を肥やすための非協力的な振舞が多発していたのであった。日本軍の物品の所有権は正確には連合軍にあったことから、後に連合軍側は自らの資産が多数盗まれたにもかかわらずタイ側に補償を求めなかったとして、タイ側が求めた補償の支払いを拒否するという態度に出ることになる。

おわりに

本論はタイ国内における日本兵の集結と武装解除の全体像を構築したうえで、その問題点を分析することを目的とした。終戦時にタイ国内にいた約12万人の日本兵は、1945年9月初めに連合軍がタイに到着してからまず全国11カ所の集結地への第1次集結が命じられ、その後11月に入ってから5カ所に集約するための第2次集結が命じられた。しかしながら、とくに北部からの輸送が滞っていたことから第2次集結は1945年中には完了せず、3月に入っても依然として多くの第1次集結地にも日本兵が存在していた。さらに、集結地以外で労務を行っていた日本兵も少なからず存在しており、1946年に入っても日本兵がいる場所は全国に散らばっていた。

日本兵の集結地は主に日本軍の駐屯地が用いられ、武器・弾薬の集積所は最寄りのタイ軍の施設を用いるのが一般的であった。武装解除は原則として第1次集結地で行われ、武装解除さ

れた日本兵はタイ軍の管理下に置かれた。このため、日本軍の集結地にはタイ軍が駐屯し、タイ兵による警備が行われた。また、武装解除によって接收した武器・弾薬は海上投棄などの形で処理されたが、日本兵の移動に時間がかかったために輸送が遅れ、最終的に連合軍側ですべてを処分できなかった。

このような日本兵の集結と武装解除の際に問題となったのは、輸送、宿舎、窃盗であった。タイの鉄道は戦時中の空襲によって輸送力が大幅に低下しており、大量の日本兵や武器・弾薬の輸送によってタイ軍の帰還を遅らせたほか、輸送力不足によって数多くの日本兵が徒歩行軍を強いられることになった。宿舎の整備は日本側の任務であったが、タイ側で資材調達を行ったり、また集結地や集積場を警備するためのタイ兵の宿舎の整備が必要となる場合もあった。そして、日本軍の豊富な物資や武器を狙った集結地や集積場での窃盗・強盗が頻発し、警備のタイ兵が関与している場合もあった。すなわち、タイ政府は連合軍による日本兵の集結と帰還に積極的に協力する姿勢を示し、連合軍側もそれを評価していたものの、現場においてはタイ官憲による非協力的な振舞が存在していたのである。

今後の課題としては、接待や給養の実像を解明することが挙げられる。日本兵の集結と武装解除に伴い、日本兵が消費する食糧の調達、すなわち給養もタイ側の任務となった。さらに、タイ側は連合軍兵の接待や給養も行う必要があり、接待や給養がタイ側の大きな負担となっていた。この接待や給養に関する資料も少なからず存在することから、接待や給養の実像を明らかにすることができるものと期待される。

付 記

本稿はJSPS 科研費 JP22K12572 による研究成果の一部である。

参 考 資 料

- (1) 防衛省防衛研究所（防衛研）
陸軍一般資料 中央一部隊歴史全般
南西一泰弘印
- (2) タイ国立公文書館資料（National Archives of Thailand: NA）
軍最高司令部文書（Ekkasan Kong Banchakan Thahan Sungsut, เอกสารกองบัญชาการทหารสูงสุด）（Bo Ko. Sungsut, บก. สูงสุด）
内閣官房文書（Ekkasan Samnak Lekhathikan Khana Ratthamontri, เอกสารสำนักเลขาธิการคณะรัฐมนตรี）（[2] So Ro., [2] สร.）

参 考 文 献

- 藤掛寅七（編）. 1986. 『軍旗のもとに 歩兵第八十五聯隊史』東京：歩兵第八十五聯隊史刊行会.
歩兵第八聯隊史編纂委員会（編）. 1983. 『歩兵第八聯隊史』歩兵第八聯隊史編纂委員会.

- 歩兵第二百十三聯隊戦誌編さん委員会（編）。1982.『歩兵第二百十三聯隊戦誌』常澄：歩兵第二百十三聯隊戦誌編さん委員会。
- 市川健二郎。1987.『日本占領下タイの抗日運動——自由タイの指導者たち』東京：勁草書房。
- 楓三大隊編集委員会（編）。1988.『追憶 楓三大隊の記録』東京：楓三大隊会。
- 貝塚 昶（編）。1972.『あゝビルマ——第二十六野戦防疫給水部記録』京都：美鴨会。
- 柿崎一郎。2018.『タイ鉄道と日本軍——鉄道の戦時動員の実像 1941～1945 年』京都：京都大学学術出版会。
- . 2022.『草の根の日タイ同盟——事件史から見る戦時下の日本人とタイ人』京都：京都大学学術出版会。
- Kirby, S. Woodburn. 1969. *The War against Japan. Vol. V: The Surrender of Japan*. London: Her Majesty's Stationary Office.
- 厚生省引揚援護局史料室（編）。2010.『南方軍復員史 別冊 下』東京：ゆまに書房。
- 増田 弘。2019.『南方からの帰還——日本軍兵士の抑留と復員』東京：慶應義塾大学出版会。
- 宮元静雄。1985.『第二次世界大戦における東南アジア連合軍の終戦処理』東南アジア連合軍の終戦処理刊行会。
- 南友会回想録編纂委員（編）。1976.『遥かなるバゴダ——元野戦高射砲第三十六大隊第一中隊大東亜戦争回想録』東京：南友会。
- 二輪会（編）。1970.『ビルマ戦線わだちの跡——第二野戦輸送隊戦記集』東京：二輪会。
- 大崎純一。1978.『感状部隊鉄五第二大隊 かく戦えり』平塚：泰緬会。
- Prasad, Bisheshwar, ed. n.d. *Official History of the Indian Armed Forces in the Second World War 1939–45, Post-War Occupation Forces: Japan & South-East Asia*. Uckfield: The Naval and Military Press.
- Reynolds, E. Bruce. 2005. *Thailand's Secret War: OSS, SOE, and the Free Thai Under-ground During World War II*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Roberts, M.R. n.d. *Golden Arrow: The Story of the 7th Indian Division*. Uckfield: The Naval and Military Press.
- 田村政司。1988.『第7野戦補充隊の編成・行動の概要（改訂版）』私家版。
- Thawi Thirawongseri (ทวี วีระวงศ์เสรี). 1981. *Samphanthaphap Thang Kan Mueang Rawang Thai kap Yipun (สัมพันธภาพทางการเมืองระหว่างไทยกับญี่ปุ่น)* [The Political Relation between Thailand and Japan.]. Bangkok: Thai Watthana Phanit.